

「子どもの見る眼」から「子どもを見る眼」へ

恒川 直樹

一 大人の働きかけと子どもの受けとめ

本稿を執筆中、こんな報道に接しました。

「しかりの受け止めに差 大人の考え、子に伝わらず」
——大人の61%が、「悪いことをしたら近所の子どもでもしかる」としたのに、しかられていると感じている子どもは18%にとどまることが14日、文部科学省の調査で分かった。いじめられている時の大人の対応についても、子どもの認識と差があり、大人の考え、行動が子どもにもうまく伝わっていないことが浮き彫りになった。文科省は「大人は自分がしていると思っっている以上に積極

的に子どもに関与しないと、子どもは大人に気にかけてもらっているという実感を持ちにくい」としている——

(二〇〇六年二月十四日付 共同通信社配信)

この調査は、中央教育審議会の生涯学習分科会によるものです(註)。大人と子どものお互いの関係認識のずれという目に見えにくい何かが、万人に訴えやすい数値の差として表わされるところが面白くもあり、また危うくもあるように思います。「%」という数字に還元された大人と子どもの実感は、どのような個々の経験から生まれてきたのでしょうか。

この調査報告の趣旨はともかく、大人と子どもの思い

が重なったりずれたりといったことは、家庭や地域の子育てのみならず、保育においても本質的で奥の深い問題でしょう。この問題を考えるとき、子どもが身近にかかわる大人をどう見ているか、いわば「子どもの見る眼」が私たち大人のありようを映し出す鏡となることは日々実感されるところです。

私は二十歳の頃から十年弱の間、とある保育園の協力を得て、保育を観察させてもらいながら発達や保育の研究、つまり「子どもを見る」ことを続けてきました。研究のための「観察」というと、子どもたちから一定の距離をとってビデオカメラを回すような、いかにも研究者然とした姿が思い浮かぶかもしれません。けれども私は当初から（恩師の導きもあって）むしろ、子どもたちと直に接してその息づかいや存在感を生き生きと感じるなかから、研究すべき何かを掴み取りたいと考えていました。そのため、小さなメモ帳の他はほとんど身ひとつで保育の場に飛び込み、発達や保育の経験も知識もろくにもち合わせないままに、手探りで観察を始めたのでした

（園の皆さんがそのような私を受け入れてくださったことは、昨今の子どもを取り巻く厳しい社会状況を見るにつけ、本当に僥倖だったと思います）。

園の子どもたちに対しては、「なおちゃん」という愛称で紹介してもらいました。何度も通って一緒に遊んだり給食を食べたりしながら保育の一日を共にし、互になじんでいくうちに、「なおちゃん」のイメージが次第に子どもたちの間にできあがっていきます。その頃の私の姿を思い描くには、初めて観察実習に訪れる実習生や、体験学習の中高生の雰囲気と比較的近いと思います。子どもたちは、週に一日か二日、特に何を教えるためでもなく遊びに来るお兄ちゃん、というような認識だったでしょう。一方の私のほうでも、次第に一人ひとりの子どもの姿がある程度見えてくるようになりました。研究者の立場からはしばしば「ラポールが取れた」といわれるように、ようやく観察の準備が整ったわけです。けれどもそれから長い間、私の「観察」は、子どもや保育者の姿を「見ること」に向かおうとしながら

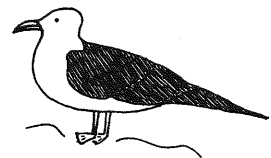
も、むしろ彼・彼女たちに「見られること」から学ぶことが多かったように思います。そんな当時の出来事から、ひとつ取り上げて紹介しましょう。

二・エピソード「なおちゃんもたまには……」

私が初めて園を訪れてから一年ほど経った十月、春から観察に入っていた四歳児（年中）クラスでの一コマです。給食の時間、担任の先生が用事でちよつと保育室を離れて大人が私一人になったときに、あるテーブルの男子三人程がおしゃべりで盛り上がっていました。食事の中の会話が楽しいのは何よりなのですが、口よりも身体全体で表現する彼らのおしゃべりには次第に熱がこもってきて、半ば立ち上がって箸を持った手を互いの顔に突き出すような、傍目にも危なっかしい状況になりました。他のテーブルで給食を食べていた私は見かねて、「ちよつと、お箸持ったままそんなことしてたら危ないよ。それにごはん食べてるときに立つのはお行儀悪いよ」というように穏やかに声をかけて注意をしたのです

が、子どもたちは一瞬こちらを見て収まっても、すぐにまた元に戻ってしまっています。

しばらく後に少し声の調子を強めて注意してみても同じことが繰り返され、ついに私は思い切ってそれまで保



育園で出したことのない大声で、「やめなさい！ 危ないって言うてるやろ！」ときつく叱りました。その瞬間、叱られた子どもたちばかりかクラス全体がシーンと水を打ったように静まりかえって、目を見開いた驚きの眼差いで私を見つめます。予想以上に効き過ぎたお灸で張りつめた気まずい空気に、子どもたちだけでなく私のほうもどうしようかと戸惑っていると、私と同じテーブルに着いていた一人の女の子がその静寂を破ってひと言。

「なおちゃんもたまには良いこと言うなあ」。彼女はいいかにも感心したという風情で頷きながら、笑いを含んだ声でユーモラスに言いました。一瞬の間があつて徐々に子どもたちの間に笑いが広がるなかで、私は『たまに

は「つてなによ」と彼女に笑って応じつつ、ほっと息をついたのでした。

三 「子どもの見る眼」と私のありよう

この出来事全体にはまずもって、当時子どもたちが私をどのように見ていたか、そしてその眼差しに映し出された当時の私のありようが示されています。私はどうふるまうべきだったのか、という実践上の問いも大切なのですが、限られた紙幅のなかでは議論の焦点を最後の女の子（以下「Aちゃん」とします）の発言に孕まれる意味に絞りたいと思います。

この芝居つ気たつぶりの言葉はその内容と発せられた声の調子、そしてその場の状況とがあいまって、明らかにからかいの雰囲気を感じていて、それまでの張りつめた緊張がある種のユーモアへと転化させました。身近な子どもに思わぬところで「一本とられた」経験は誰しも大なり小なり持ち合わせていると思いますが、一般にそうした出来事を大人と子どもの関係の側面から見てみる

と、関係が比較的親密で気安いこと、大人が子どもに対して不意に弱みを顕わにすることなどが含まれています。そうして日常の大人と子どもの非対等で不均衡な関係が逆転すること、それも大人がわざと負けてやるのではなく子どもの機知によって一瞬逆転させられるところに、このような出来事の面白みがあると思われまます。

ここで、Aちゃんの「たまには」という言い回しの含みについては、少し背景の説明が必要でしょう。私は保育室で特別な仕事は担わず、あえて言えば、子どもと遊んだり遊ばれたりするのが「仕事」でしたが、もちろん子どもと完全に同じではありません。時と場合に応じて、保育者の補助とはいかないまでも、一応の分別をもった大人としての役割を担うことはありました。具体的には、ちょっとしたケンカの仲裁や明らかに危険な行為を止めるといったことで、このエピソードもそうした場面のひとつです。

ただ、そうやって手を出すときの私はいくらか腰の引けたところがあつて、とりあえず対応してはみるもの

の、途中からは担任や近くの先生に引き継ぐのが常でした。これは私の立場や能力上の制約でもありませんでしたが、

それ以前に、一人の大人として子どもとしっかり向き合えていなかったことは否めません。おしゃべりしていた男の子たちは、私の「注意」を、学校のチャイムに諭えるならば（本鈴の前の）「予鈴」程度にしか受けとめていなかったといえるでしょう。「担任の先生に叱られるまでは大丈夫」というわけです。彼らに限らず、あるときは他の年長の女の子に「なおちゃんは注意はするけど、おこらへんもんなあ」とにこやかに評されたこともありました。それは裏を返せば、いざというとき頼りにならないということであって、ケンカの仲裁を頼みにきたときに担任の先生が近くにいななくて、「なおちゃんでもいいわ」と前置きしてから私に頼んできた子どももいました。ですから、私に大声で「おこられた」とき、子どもたちはただビックリしたのではなく、「いつもはおこらへんのに、今はなんで？」という疑問も浮かんでいたはずです。こうした事情を背景にしてみれば、「たまには

良いこと言うなあ」という言葉は、まさに私の痛いとこを鋭く突くものでした。

さらに正直に言えば、私が意を決して（と同時にやはりいくらかは腹を立てて）大声を出したのは、「危険な行為を止めなければ」というまっすぐな気持ちだけからではありませんでした。実はこの出来事をその直後にとりあげた卒業論文では、「先生がいなくて怪我でもされては困るので」ついに大声を出して叱った、とあつげらかんと記されています。当時も幾分自嘲気味に書いた一文とはいえ、今あらためて読むと赤面するほどの無責任さです。少なくとも今の私には、Aちゃんの言葉はこの屈折した自分自身の態度を揶揄するようにも響いてきます。

四．「子どもを見る眼」へ

ここまで「子どもの見る眼」が映し出す私のありようをやや反省調で述べてきましたが、本当に大切なのは、それを鏡としてさらに「子どもを見る眼」へと向かって

問い返していくことだと思えます。

このエピソードでのAちゃんのありようをひと言で表わせば、「おませ」だということになるでしょう。彼女は普段から、大人顔負けのことを言ったり、場を仕切ったりできる子どもでした。大人に親しみをみせ、なかなかの甘え上手でもあり、私にもよくなつてくれていて、このときも同じテーブルで一緒に給食を食べていました。ですからこの発言は、ある意味ではとてもAちゃんらしい言い回しで、私との気安い関係のなかでいつものおませっぷりが発揮された、と受けとめて済ませることもできます。

けれども、私が大声を出したとき、Aちゃんが平然とそれを受けとめたとは考えられません。まず大きな声というのは、予測していない限り（あるいは予測しているも）、心身に直接響く刺激として、半ば反射的に驚愕の反応を引き起こしますから、彼女もほかの子どもたちと同じように、一瞬ドキッとして身体が固まるような感覚を覚えたはずです。さらには、「いつものなおちゃん」

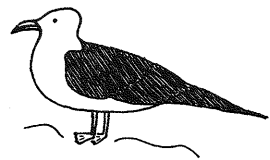
とは違う私の強張った声や表情など全体的な相貌に、まるで初めて出会った見知らぬ人のような違和感を感じたのではないでしょうか。おそらくここまでは、ほかの子どもたちもほぼ一様に経験したことで、大声に反応して一斉に私を見つめたとき、十数人の視線はさながら「!?」マークの大きなひとつの眼差しだったといえます。

とはいえ、やはりAちゃんの独自のふるまいは、この状況に彼女なりに対処しようとしたことの表れだと思えます。右に記したように、普段一緒に遊んでいる「いつものなおちゃん」に戻って欲しいという、幼い子どもとしての願いもあったでしょう。その一方で、まるで自分が年季の入った保育者でもあるかのように「なおちゃんもたまには……」と評してみせた彼女は、憧れる「大人」や「先生」の気分をいくらか味わっていたようにみえます。おそらく私が大声を出すまでの流れを気にとめていた彼女は、私の大声の理由を一瞬遅れてではあってもある程度理解できたでしょう。そして叱ってから宙ぶ

らりんになっっている私の妙な雰囲気もなにかしら感じていたかもしれません。もちろん私は、彼女が計算ずくの皮肉としてこの言葉を発したのだといたいわけではありません。むしろ、状況の理解、幼い子どもとしての不安な気持ち、ちよつと背伸びして大人ぶった気分などが渾然一体となつて生じてきたとき、聞き覚えていた大人のセリフがその身振りと共に自然と口をついて出た、と考えるほうがふさわしいのではないのでしょうか。

この「おませ」な言葉は、その場と私の姿を子どもなりの眼差しで描写すると同時にユーモアの力で揺り動かそうとするものでした。考えてみると「ませた」という形容には、子どもが成長することに対する肯定と否定が入り混じつた、大人の相矛盾する思いや願いが籠もつています。正直なところ私自身はAちゃんのおませっぷりに窮地を「救われた」心持ちでしたが、彼女にしてみれば、逆に一喝されるかもしれない状況ではありません。自分は叱られた当事者でなく、いくら気安い「なおちゃん」相手とはいえ、大人がいつになく本気で叱つた姿を

からかうようなことを言うのは、なかなか大胆な賭けだったと思います。とはいえ、彼女がやぶ蛇を覚悟の上で賭けに出たようにも思えません。むしろ、子ども自身も意識せずに遊びのような軽やかさで発せられたひと言に、その子なりの様々な思いや願いが凝縮されて籠もつていることの不思議さ、面白さ、そして大切さを、このエピソードからはあらためて感じます。



五．おわりに

思えば、初めて観察に訪れてから十年近くを経て、私もずいぶん大人らしくふるまうようになりました。子どもをかわいがるのも叱るのもそれなりに板に付いてきて、子どもたちからは「なおちゃん」よりも「なおちゃん先生」と呼ばれるほうが多くなっています（もちろん現場の先生方とは相応に違った存在ではありますが）。そうしてある程度の知識と経験を伴つた「子どもを見る眼」を養っ

てきたことはまだまだ若輩ながらも私なりの成長かもしませんが、一方で「子どもの見る眼」に対する当初のナীবサは良くも悪くも失われてきているように感じます。

冒頭に引いた調査報告は「大人が自覚する以上に子どもへの働きかけが必要」と提言していました。子どもと大人の関係の希薄化が叫ばれる昨今、それは当然の主張であり、働きかけなくして共に生きる関係は成り立ちません。ただその一方で大人は現に自分が行っている子どもへの働きかけの意味を、本当に「自覚」できているのだろうかという疑問を、私自身も含めて感じずにはいられません。事実、私の大声も「危険な行為を厳しく叱った」という見かけの水面下には、及び腰で子どもたちとかわる私の態度を始めとして、様々な意味が渦巻いていました。それらは子どもと大人の関係において生まれ、またそこに還流するものです。「自覚」と「働きかけ」について大人が問うべきは単にその程度や量ではなく意味であり、これらは常に子どもという他者に対する

大人の「他覚」と「受けとめ」と対になっているはずですが、したがって、調査が示した「差」はあくまでも意味への問いの契機のひとつとして役立てるべきであって、答えではないでしょう。それを大人の内に回収してしまえば、「大人が自覚する以上の働きかけ」は独りよがりの押しつけと紙一重のところに陥ります。

とはいえ、子どもも大人も生きて変化し続ける存在である以上、「子どもの見る眼」と「子どもを見る眼」は、ずれたり重なったりを繰り返していくほかありません。それでもどこか重なり合う手心ある意味を求めて、むしろそのずれをも原動力にして日々子どもたちと向き合い、共に生きる意味を問い続ける面白さと難しさは、保育実践にもその研究にも、根底で通じるものではないかと思っています。(常磐会短期大学)

註 「地域の教育力に関する実態調査」報告(案) 平成十六年二月十四日 文部科学省ウェブサイト (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyov/chukyov2/siryou/003/06021701.htm)